

まぼろしの

だい
ゆう

大誘かい事件

じ
けん



矢張雄太郎・作
栗田伸子・絵

汐文社

作者・画家紹介

矢張雄太郎(やはり ゆうたろう)

1946年、大阪生まれ。明治大学法学部卒業。
新聞記者をへて著作活動にはいる。
最近、児童向き推理小説に挑戦。
現住所 〒244 横浜市戸塚区飯島町2255の11

栗田伸子(あわた のぶこ)

宮城県生まれ。武蔵野美術短期大学卒業。
デザイン会社勤務をへて独立。
「知育図鑑」(学研), 「ことばえじてん」(角川書店)のイラストなどのほか、ペーパークラフトも手がけている。

児童推理小説 □

まぼろしの大誘かい事件 だいう じけん 定価980円

1984年10月15日 初版第1刷発行

作 者 矢張雄太郎

画 家 栗田伸子

発行者 吉元尊則

発行所 (株) 汐文社

東京都文京区本郷1-26-10 中村ビル

電話 03(815)8421~4

振替 東京2-14150

印刷所 平河工業社

製本所 東京美術紙工

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

児童推理小説 1

まぼろしの大誘かい事件

だい
ゆう
じ
けん

矢張雄太郎・作
栗田伸子・絵



汐文社

もくじ

1 きみのような宿題 しゅくだい 6

2 ぼくたちの新聞社 23

3 ぶきみな人影 ひとかげ 40

4 あやしい男は幽霊か ゆうれい 57

5 やまぐちこもん
山口顧問の入社 75



10	10	8	7	6
あとがき	意外な真犯人とその動機	やつと解けた謎	おどろきの大連続	お寿司と暗号
182	162	149	132	95



作者 矢張雄太郎

画家 栗田伸子

装丁 オーク

まぼろしの大誘^{だいゆう}かい事^じ件^{けん}

1 きみょうな宿題^{しゅくだい}



「じゃ、通知表をわたします。五年生の授業はきょうで終わりですが、六年生はクラスが持ちあがりですから、また休みが終わったらなかよく勉強しましょう。それから、休みのあいだの宿題^{しゅくだい}だけでも——」

担任^{たんいん}の山口^{やまぐち}先生が、メガネを持ちあげるしぐさをしたので、ぼくはオヤと思った。山口先生がまるい顔をほころばせてメガネをずりあげると、いつもなにかをたくらんでいるのだ。でも、おこるときはメガネがずりおちてもぜんぜん気にしないから、それよりは安全なんだけれど。でも、やはり宿題なんていわれてはだまっているわけにはいかない。みんな、口をそろえて、「えーっ」「えーっ」と、抗議^{こうぎ}の声をはりあげた。もちろんぼくも。

「そんなのないよう。どこのクラスでも春休みは宿題なんかないよう。」

先生は、ふっふっふつと笑^{わら}って、いった。

「まあ、あわてるな。宿題といってもテストじゃない。」

春休みのあいだにひとつ楽しい思い出をつくってやること。それもできるだけユニークな思い出だ。家の人と旅行したり、本を読んだ、というのでもいいけれど、もったかかったことをした、というようなのがいいな。できるだけ知恵をしぼったやつがいい。いいかい、学校ではいろんなことをおそわるね。分数や小数の計算、植物の光合成、上水道が家にくるまで、それに漢字も。でも、これらは知識なんだ。もちろん知識もたいせつだし、おぼえなきゃいけないけれど、春休みには知識をふやすだけでなくて、うんと知恵を出してほしいんだよ。」

「その知恵はどうやればよく出るのですか。」

クラス委員の城さち子が手をあげていった。クラスでいちばん勉強できるだけに、知恵もたくさん出したい、というわけだ。それにさち子は女の子にしてはノッポでガリだから、少なくともやせた体からはもうなにもしほりだせない、と心配したのかもしれない。

「うん、そこだね。知恵を出す方法はいくつもあるよ。むかし、達磨というえらいお坊さんは、

この知恵を出そうとして九年間もかべにむかつて座禅を組み、とうとう足がなくなってしまった、といわれている。ほら、七転び八起きのダルマさんを知ってるだろ。あれは考えているすがたなんだよ。でも、先生は、じつと考えるだけでなくて、できるだけ体をうごかしてなにかをやってみるほうをすすめるね。なにかをしていれば、どうしてもこまることもでてくる。そのこまったときに、＼どうしよう＼といういろいろ考えるね。それが知恵をしほりだすことになる。だからまず、なんでもいいから、いちばんやりたいことにいっしょうけんめいと取り組んでごらんよ。」

「でも、それをさがすのがたいへんだなあ、知恵がないと。」

いちばんうしろのほうで竹田の声がして、みんなドツと笑った。竹田はかけっこものろいし、勉強も得意じゃない。でも、コロコロふとつていて体がデカイから、相撲はクラスで負けたことがない。

「おまえの場合は、いちばん体をうごかす必要があるかもしれんぞ。シェイプ・アップにもなるしな。」

みんな、ドツと笑った。竹田も負けていない。

「先生の場合は、知恵をしぼって、早くいいお嫁さんをもらうことでーす。」

といいかえした。これにはクラスじゅうが爆笑の渦になった。先生は三十二歳だけれど、まだ独身だ。ここが先生の弱点なんだ。

「そうだな。先生も考えてみよう。」

「考えるだけでなくて、知恵をしぼっているんな女の人に声をかけてみなくちや。」

だれかがアイデアを出した。

「先生の宿題はガール・ハントだ。ワイイ。」

こうなるとクラスのなかは、がぜんさわがしくなってきた。拍手がおきる。口笛も鳴る。

「わかった、わかった。先生もこの春休みにいい思い出をつくるよう努力するよ。だからみんなも、ふだんできないかわったおもしろいことをなにかひとつやってくることに。わかったな。新学期

期になったら、それを作文に書いてもらうから。これが五年生さいごの宿題だ。じゃ通知表をわたすから出席簿順にとりにおいで——」

ぼくの通知表は、まずまずだった。だって、この五年間、ほとんどの科目が「ふつうです」で、「よくできました」は「体育」だけだ。しかし、なにごとも安定している、というのはだいじなことだ、と先生がいったことがあるから、お母さんにわたすときいつも、「安定しているよ。」

ということにしている。きょうもまた、そのセリフが使えるわけだ。

学校の校門を出て、竹田と永井がぼくに話しかけた。

「ねえ、どうするあの宿題？」

「どうするって。やっぱり知恵をしぼらなきゃいけないなあ。サイクリングや釣りじゃつまんないしな。」

ぼくたち三人は、よくサイクリングをしたり釣りに行ったりする。でも、そんなことは春休みでなくてもやってるし……。

「プロレスごっこはどうか。タイトルをつくって。全校チャンピオン戦。六年生は卒業して、もう竹田より強いやつはいないから、竹田はチャンピオンになれるぞ。」

永井はそういつてアントニオ猪木のまねをして下アゴをつきだした。

「いやだよ。そんなことをやったら、山口先生に『やはり知恵を使わず、体だけを使ったな』といわれるよ。」

竹田はすこしふくれ顔をした。もともと色が白く、ほつぺたがふくらんでいるから、ふくれると、まるで肉マンだ。

「じゃ、お寿司の早食い競争はどうだ。おまえんちの店でコンテストをやるんだ。一位はお寿司代無料、二位は半額、三位はのり巻一本プレゼント。お客がどつきりくれば、これくらいのサービスはすぐもととはとれるし、お店は大繁盛——。おまえんちのおやじさんもよろこぶぞ。」

永井は大口をあけてパクパク食べるまねをした。

「……うーん、でもお父さんがなんていうかなあ。」

竹田の家は駅前の『金太郎寿司』だ。たしかに全校プロレス大会よりはまともな気がするけれど、もうすこし、なにかないかなあ。ぼくの家はサラリーマンだから、あまりおもしろいことはできないし、永井んちは電機屋だったなあ……。

「あつ、そうだ。いいことがある。これはおもしろいぞ。」

ぼくはとつぜん、ひらめいた。

「なんだい、原田。」

「お寿司の早食い競争よりも、もつとショッキングな催しができるぞ。全日本電気人間コンテス

トというのはどうだ。」

「なに、それ。」

「永井んち、電圧計があるだろ。」

「そりや、商売道具だからな。」

「それで電圧をはかりながら、お客さんに電氣を通すんだ。だれがいちばん、電氣に強いか。いちばん電氣ショックに強いものが、第一回電氣人間チャンピオンだ。」

「えーっ。」

「そんなことをしたら感電して死んじやうよ。」

と竹田。

「だから電圧計を使って、死なないようにジワジワ電圧をあげていくんだよ。さいしよは五ボルト、次は十五ボルト、そして二十ボルト、三十ボルト……。さいごが恐怖の百ボルトッ。」

「ビリビリビリ、きえーっ。」

永井は大げさに白目をむいて小さな体をふるわせた。

「だめだよ、さいごは拷問になっちゃうよ。」

と、竹田。永井も、

「うーん。むかし、お風呂屋さんで『電氣風呂』というのがあった、とお父さんがいつてたけれど、やっぱり、ウチの店ではダメだ、というよ、きっと。だって感電する商品売りたいだも

んな。ウチがお風呂屋さんなら、こつそりやってみるんだけど——」

「やっぱり、ダメか。うーむ。」

ぼくはうなつた。こうして考えてみると、なかなかユニークな思い出をつくるのもむつかしいものだ。三人とも歩きながら、また考えこんだ。

そのとき、うしろから、「ちよつと、きみたち——」と、声がした。

ふりかえると、黒いボストンバッグを持ったへんな男が立っている。灰色のハンチングに、黒いサングラス。それに白いマスクをしている。まるで、顔を見せるのがいやでいやでたまらないみたいだ。灰色のジャンパーに黒ズボンというのも、なんとなく得体のしれない感じ。男はぼくたちに近づいてきて、みょうにくぐもつた声できいた。

「ここからいちばん近い交番はどこかな。」

「駅前です。」

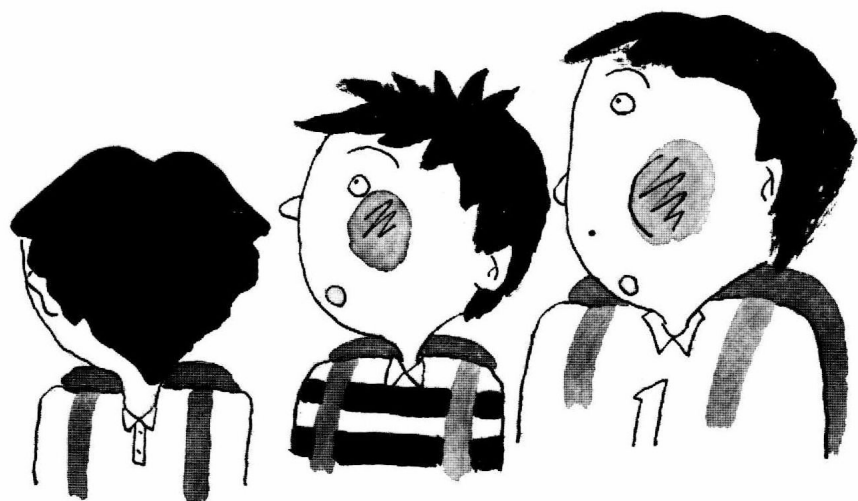
ぼくはすこし安心していった。交番をさがしているのなら道をきくためだろう。ところが男は、へんなことをいったのだ。

「やっぱり駅前か。歩いて十二、三分はかかるね。」

「はい。」

「じゃ、このへんはあまりおまわりさんがパトロールしないわけだ。」

「はあ？」



ぼくたち三人は顔を見あわせた。おまわりさんがときたま自転車に乗っているすがたを見たことはあるけれど、パトロールしているかどうか、なんてのはわからない。

「おじさん、どこかの家をさがしているの。」

と、永井（ながい）がきくと、男はあわてていった。

「いや、そういうわけではないけどね。きみたち桜ヶ丘（さくらががおか）小学校の生徒だね。」

「うん。」

「じゃ、もういいよ、ありがとう。」

男はそういつて学校のほうに歩きだした。

「へんなオッサンだなあ。」

と、竹田（たけだ）が小声でいった。

ぼくたち三人が男のうしろすがたを見ていると、男は、きゆうにふりかえった。そして、かく手をふつて早足になり、道をまがってしまった。

「おかしいよ、あの男。おまわりさんがパトロールするかどうかなんて、ふつうの人はきかないぜ。」と永井。

「それにあのサングラスやマスクもなんだかあやしいなあ。いまどき、あんなマスクする必要はないだろ。」

と竹田。たしかにインフルエンザの流行はとくに終わっているし、こんなにあたたかいのにマ

スクはへんだ。顔や声をかくすためだろうか。

「それから、交番とは反対に学校のほうへ行つたぜ。もし道をきくなら交番のほうへ行くはずだよな。」

と、ぼく。ということは……

「ド・ロ・ボ・ウ！」

三人は口をそろえてさげんだ。

「おい、あとをつけよう。」

「でも、強盗ごうとうだったらピストルか出刃包丁でばほうちやうを持つてるかもしれないよ。」

竹田は、すこし心配顔でいう。だいたい、竹田は大きな図体ずたいのわりに臆病おくびやうなんだ。ふとつているからバカ力を出せば、クラスでいちばんはもちろんのこと、たぶん五年生でいちばん強いのに、こんなときはいつもへつぴり腰だこし。

「だいじょうぶだよ。おれたちは三人もいるじゃないか。それになにかあれば大声を出せばいいだろう。おまえだって、あいつと相撲すもうをとれば負けないだろ。得意とくいのサバ折おりで腰こしの骨ほねをくだいてしまえよ。ぼくも応援おうえんしてやる。」

「そんなこといつて、にげるときはいつも永井ながいと原田はらだにおいてきばりにされるんだから。」

「だいじょうぶだよ。きようはにげないよ。約束やくそくするよ。」

と、永井もけしかけた。